

演題番号：A9

異物の穿通による脊髄損傷を生じた猫の1例

○寺尾将司¹⁾，植村隆司¹⁾，長谷川裕基¹⁾，入江洋司²⁾，秋山紘平³⁾，神津善広³⁾，小澤 剛¹⁾

¹⁾ KyotoAR 獣医神経病センター ²⁾ アニマルホスピタルくみやま ³⁾ 北摂夜間救急動物病院

1. はじめに：口腔内から頭頸部への箸の刺入は猫における外傷性脊髄損傷の原因の1つで、重症の場合は生命を脅かす事故となる。今回、刺入した箸が脊髄まで達して重度の脊髄障害を生じた猫でMR検査を行い、結果をもとに過去の報告と異なる術式により外科的摘出を行なった。本例をもとに、診断および術式選択におけるMRIの有用性を検討した。

2. 材料および方法：雑種猫、去勢雄、8.2 kg、BCS：8/9、9歳齢、既往歴なし。箸で遊んでいたところ箸が口腔内に刺さり虚脱した。先端の欠けた箸が横に落ちていた。救急病院を受診した後、当院を紹介受診した。

3. 結果：第1病日、救急病院にて意識レベル低下および四肢不全麻痺を認めた。CTにおいて脊椎を貫通する低吸収領域が確認された。第2病日、当院受診時の意識レベルは鈍麻～昏迷であり、神経学的検査からは頭蓋内およびC1-5脊髄分節での病変が示唆された。MRIにおいて頭頸移行部に線状の占拠性病変を認め、箸の先端の残存と判断した。箸は環椎腹側から脊椎を貫通し背側の筋群まで達していたことから、背側アプローチにより異物摘出術を実施した。MRIで確認していた異物直上を切開すると筋膜下にて容易に先端を確認で

き、異物を摘出した。排膿を認めたため細菌学的検査用に採材し、十分に洗浄し閉創した。薬剤感受性検査に基づき抗菌薬を第38病日まで継続した。術後は合併症なく徐々に症状が改善し、第105病日現在では10歩以上の歩行が可能となった。

4. 考察および結語：Nakanoら(2020)は、異物が脊柱管内に残っていた2例のうち手術で摘出した1例で経過良好、内科治療の1例は死亡したと報告している。本例でも外科的摘出後の経過は良好であった。死亡例では残存した異物が致死的な神経障害を引き起こしたと推測され、脊椎を貫通した異物の刺入事故においては迅速な外科的摘出が重要と考えられた。手術計画には適切な画像診断が必須であり、特に木製異物におけるMRIの有用性が改めて示唆された。また、これまで報告された術式は腹側アプローチに限られているが、本例ではMRIの結果から背側アプローチを選択し良好な結果を得た。本例の経験より脊髄損傷の症例においてMRIが有用であることが示され、今後も積極的に活用することが望まれる。